

427 妊娠悪阻症状を契機に診断、治療を行い得た *Helicobacter pylori* 感染の一例

大分医大

弓削彰利, 西田欣広, 高見勇次, 宮川勇生

【緒言】妊娠初期にみられるつわり、妊娠悪阻は日常によくみられる妊婦の消化器症状であり、その原因は種々報告されているが、いまだ解明されていない。今回我々は妊娠悪阻症状を契機に診断された *Helicobacter pylori* (*H. pylori*) 感染の一例を経験し、除菌治療により著明な悪阻症状の改善が認められた症例を詳細に検討した。尚、診断、治療については十分に説明を行って本人、家族の了解を得た。【症例】症例は32歳、未経妊。最終月経を平成10年4月26日より6日間として妊娠し、初期より当科で follow-up した。妊娠6週頃よりつわり症状が出現し、外来指導で経過観察した。6月中旬よりつわり症状が悪化し、経口摂取も困難になったため6月25日(妊娠8週)より入院、輸液管理とした (Emesis index 10点)。入院後の輸液治療にも抵抗し、症状がさらに悪化したため、胃食道内視鏡検査を施行した。胃粘膜のウレアーゼ試験陽性、また¹³C-Urea Breath 試験陽性より *H. pylori* 感染による胃炎と診断した。同菌に対して Amoxicillin を1日1,500mgを1週間投与し除菌を行ったところ、症状が著明に改善した (Emesis index 13点から4点)。また、胃粘膜より培養した *H. pylori* 菌を用いて western blot 法で治療前後の血清抗体価を評価したところ、*H. pylori* 菌外膜の30Kdの蛋白に対する抗体価の減少を認めた (除菌マーカー)。【結論】MEDLINEによる検索でも妊娠中の *H. pylori* 菌除菌に関する報告はほとんどなく、本症例を通して治療に抵抗するつわり、妊娠悪阻症状に対しては消化器由来の原因も念頭におき、*H. pylori* 菌の検出、除菌の必要性、有効性を示唆した。